

パネルディスカッション1 世界で活躍する臨床工学技士の挑戦と未来『総括と展望』

座長 杉浦 陽一(元東京女子医大 八千代医療センター医療機器安全管理室)

山下 芳久(埼玉医科大学 保健医療学部 医用生体工学科)

【はじめに】

今回のパネルディスカッションでは、国際交流委員会の、今までの活動を確認し、その上で、最新の活動について先進国と開発途上国のそれぞれの関わりや成果を、8名の担当委員と国際交流支援メンバーから発表していただきました。また、開発途上国に対する日本の政府開発援助（ODA:Official Development Assistance）実施機関である独立行政法人国際協力機構（JICA）から、臨床工学技士との接点も多い部署の担当者に登壇して頂き、客観的に見た臨床工学技士の開発途上国への関わりについてのご意見・感想などについてご発言を賜りました。

【演者紹介】

- ① **吉岡淳**さんは、山形大学医学部付属病院臨床工学部のご所属で、また、国際交流委員として、積極的に米国医療機器学会AAMIへの参加、および、交流をされています。国際交流委員にとって先進国に関わる事業は未開拓の感があり、委員会のけん引役と期待されています。
- ② **園川龍毅**さんは、現在、医療法人光寿会 リハビリテーション病院のご所属で、また、国際交流委員としても、今や途上国でありながら経済大国となった中国との間で血液浄化を通じた積極的な技術交流をされています。
- ③ **楢村友隆**さんは、純真学園大学 保健医療学部 医療工学科ご所属、また、NPO法人いつでもどこでも血液浄化インターナショナル、そして、国際交流委員と、多岐にわたり、東南アジアを中心に、日本の質の高い血液浄化療法の普及に尽力され、現在も幅広い活動をされています。
- ④ **青木和一**さんは、日本光電工業株式会社で長い間、循環器部門、特にペースメーカーの開発に尽力され、ご定年を迎えてからは第二の人生として、JICA国際協力機構の海外シニアボランティアで、医療機器担当技術者としてサモアとソロモンに派遣されました。その後も、開発コンサルタントとして、現在も、ミャンマーを始めとする様々な開発途上国の医療機器管理にまつわるお仕事をされています。
- ⑤ **本名愛**さんは、日本の臨床経験を経てからJICAの青年海外協力隊として、中米のベリーズに2年間派遣され、医療機器隊員として活動をされました。その後、現在では、日本国内の開発コンサルタント会社に勤務し、同じくJICA事業のひとつであります、アフリカなど、開発途上国からの研修員受け入れ事業を、企画から講師までの幅広いお仕事を担当されています。
- ⑥ **福田恵子**さんは、直近では、WHOのインターンシップに参加された経験をお持ちですが、そもそも、日本の病院での臨床を経験してから、青年海外協力隊員として、アフリカのウガンダで医療機器担当、また、英国留学、そして、JICAの民間コンサルタントとしても活躍され、現在では聖マリア病院 臨床工学室で勤務されています。
- ⑦ **吉野洋**さんは、日本での臨床経験を経て、福田さんと同じアフリカのウガンダで青年海外協力隊とし

て活動されました。その後、現在は、主にJICAの開発援助事業を支援する開発コンサルタント会社に所属されて、10カ国以上の国々のプロジェクトに関与し、尽力されています。

⑧ **森實雅司**さんは、現在のご所属である済生会横浜市 東部病院 臨床工学部で臨床業務を担当しながらも、日本集中治療教育研究会（JSEPTIC）のCE部門代表を勤め、日々、急性期医療にまつわる沢山の問題に取り組んでおられ、そのMLリストの議論からは、急性期医療にかける熱意が伝わって参ります。そして、今回の演題でもある、JICA事業の国際緊急援助隊に登録されており、直近の「ネパール地震」からの報告は緊迫感が感じられました。

⑨ **大里圭一**さんは医療従事者としての臨床経験をお持ちであり、また、開発途上国における活動の経験もお持ちです。現在、JICA国際協力機構の人間開発部保健第一チームにご所属で、人間開発に関する技術協力や協力に関する準備調査、そして協力案件の審査・実施（実施監理）に対する技術支援等を担当されています。

【まとめ】

1988年に、臨床工学技士法が施行されてから、ようやく30年が経とうとしています。国際交流委員会の事業としては2000年頃から始められ、記憶にあるのは2002年の「ブラジル人研修生受け入れ事業」でしたので、まだ、10数年と歴史は浅い一方で、演者の皆様方のご発表からは、日本の臨床工学技士として、それぞれの専門性を生かして、それぞれの分野での活動を、各国でされていることについて、その具体的な活動と、思いの丈を、お話頂けたと思いました。

今回のパネルディスカッションから読み取れた、『世界で活躍する臨床工学技士の挑戦と未来』は、概ね次の3つです。

一つ目は、臨床工学技士として、日本において、しっかりと、確実な仕事を通して、臨床での位置づけを明確にして行く。これが、基本です。次に、海外での国際交流をとおして、日本の秀逸な臨床工学技士制度を世界中に広め、また、それぞれの国に見合う形の連携や、技術移転を継続して行き、さらに、先進国からは、新しい技術を余すところなく吸収して行くこと。そして、3つめは、前述の一つ目と二つ目の結果に結びつくことかもしれませんが、医学と工学を連携させて、安全で先進的な医療を発展させて行く、と言う、世界共通の目標を掲げる、国際臨床工学学会のような活動を、目指すことが出来たら素晴らしいと言うことかと思えます。

2012年（平成24年）12月、第2次安倍内閣が発足して以来、安倍首相は、「医療技術の海外展開は、官民一体で実現する。」と明言され、それを、国の成長戦略の一つと位置付けて、医療産業拡大への期待を示しました。そして、翌年の2013年には、経済産業省が主導し、官民一体で、医療サービスや医療機器の海外展開を推進する組織も発足させています。また、この活動は既に、メーカーやコンサルタント会社を通して進み始めていることもマスコミから伝わって参ります。

こうした取り組みは、まさに成長戦略の一環として、医療サービスや医療機器の海外展開を「オール・ジャパン」で進めようという動きになっているものと言えます。医療サービスや医療機器を海外に展開する「アウトバウンド」と言う概念だそうです。

そして、歴史が示してきたとおり、医療の発展には工学の知識を併せ持つ臨床工学技士の力が欠かせないと言うわけで、私たちは、さらなる研鑽を積み、海外に出て行くことを求められているものと理解し

ています。

ご発表頂きました皆さまの活躍の場は、大きく分けて、①先進国での取り組みと、②開発途上国支援に分けられると思います。先進国のアメリカに対して、ミャンマー、中国、カンボジア、ベトナム、サモア、アルメニア、と言う国の名前が出て参りました。

こうした、何れの海外、国々に致しましても、今後、継続した交流が求められるわけですが、これから、臨床工学技士として海外で、活躍されるには、選択肢の一つとして、JICA 国際協力機構のしっかりした制度である、青年海外協力隊やシニアボランティアに参加されることではないかと言うお話もありました。

最後になりますが、現在、国際交流委員は10名で、その他に、支援メンバーと言う皆さんが約20名おり、専用の ML で交流をして頂いていますので、今後、臨床工学技士として、国際交流に係わりたい方は、是非この ML への登録をお勧め致します。

以上